



長岡市：長岡まつり大花火大会

「博学」と「活学」

「学問」と「知識」

Vol. 21

『有源の井水』(王陽明『伝習録』)という言葉があります。

人間の学問というものは、どんなに広くても堤防で囲まれた貯水池の様なものであってはいけない。どんなに大量の水であっても、どんよりと停滞してよどんだ水は、水としては価値がありません。一方、たとえ狭くても地中深く掘り下げられた井戸は、尽きることなく活きた水を汲み上げる事が出来ます。必要に応じて湧き出す水・・・これが「活学」です。

近年、IT技術の進歩とも相俟って、さまざまな表面的な知識、情報が手軽に引き出して見る事が出来る様になりました。

しかし、それと反比例して一つの事象や物事を、自ら時間をかけて調べて読み込み、深い思索をめぐらし、過去からの人物に学び、更にさまざまな実体験を通じて自らの内省や自己の修練の中から磨き上げてくる、人間としての風韻を感じる人はほとんど見られなくなってきている気がします。

荀子は

それ学は通の為にあらざるなり
窮して困まず
憂へて意衰えざるが為なり
禍福終始を知って惑わざるが為なり

学問というものは決して出世や生活のための手段ではない。
窮した時に弱音をはいたり、心配事の為に落ち込んでしまったり、
禍いや幸せが如何に始まり如何に終わるかという事を知って、
決して一喜一憂して惑わない為にある。

と言っています。

有識者と言われる人達がそれぞれの分野に数多くいて、さまざまな行政や団体の会議があちらこちらで行われているが、大きな視野で観た場合、本質的な問題が何も変わらないのは何故なのか・・・

よどんだ水のような知識偏重の識者になるより、滾々と尽きず湧き出る水のような「活学」を実践出来る人物が、今、真に求められるように思います。

知識や教養は確かに必要では有りますが、真に重要な事はそうした知識を活かす「人間力」を身につける『学問』を学ぶ事だと思います。

命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は仕末に困るもの也
此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大事は成得られぬなり

これは西郷南洲の有名な言葉です。

個人の富とか地位や名声を求める人は世に多くいますが、西郷南洲の様な活学を実践した人物から、我々は人間としての真の生き様を学ぶ必要性を強く感じる昨今でもあります。

徳真会グループ
理事長 松村 博史